

南部伊豆諸島村落構造類型再考・その1 「親族」—八丈島中之郷を中心に—

立柳 聡*

問題の所在

日本文化・社会をどのように理解するかをめぐっては、複数の立場がある。これらの内、日本文化・社会が内部的に相応の異質性を含み、多様な地域的特性を顕現しており、しかも、その違いは時代差ではなく、別個な起源に発する本質的なものとみなし、それらを理念型である類型として捉えて理解しようとする研究上の立場や方法がある。これが日本文化・社会の地域性研究＝類型論である。

こうした研究の歴史は、住谷一彦¹、上野和男²などが巧みに整理しているが、村落構造論を起点とするものであった。また、三つの研究上の系譜がある。筆者の足場の一つである社会人類学における類型論は、農業経済学を起源に、農村社会学と響きあいながら形成されてきた経緯がある。それに率先して着手し、その後もイニシアチブを発揮した研究者の一人は、蒲生正男であった。その村落構造類型論は、1952年に最初の集約³が図られ、精緻化の研究の積み重ねを経て、最終的に1981年に四類型とする見解⁴に集約された。この年に逝去することがなければ、さらなる地域性研究が展開したであろう。これらの発展的展開は、清水浩昭⁵、上野和男⁶などによって継承されていった。しかし、なおも継承し、検討すべき課題は残されていると考える。

その一つは、蒲生の四類型において、「その他」とされた村落をどのように理解するかである。同族制でも年齢階梯制でもない第三の社会として、この類型によって蒲生が捉えようとしたのは、南部伊豆諸島と奄美の村落であり、それを「積極的に特徴づけるものは著しい双系出自規制である」⁷とされる。こうした見解をめぐっては、その後様々な意見が出され、村落構造をめぐる研究が一段と深められていくことになった。後ほど、主要な見解の要点を整理してみたい。しかし、例えば、脚注7の『伊豆諸島』をまとめる前提となった蒲生、坪井、そして、村武精一による八丈島末吉、青ヶ島における調査が、それぞれ4日間、8日間といった事実に端的なように、南部伊豆諸島をめぐるのは、その後も全般に短期の限定的な調査に基づく立論が多いと認識する。筆者らはこの点を重く受け止め、長期に渡って頻繁な訪問を繰り返し、最大限全戸調査に迫る世帯調査ほか、住民の皆さんとの丁寧な信頼関係を築きながらの聞き書きや、様々な行事における参与観察などを続け、自分たちの見解をまとめることを志し、早くも20年が経過した。本論文は、蒲生の逝去30周年となった2011年を契機として、その成果物の一つとして上梓するものであり、最終的に、蒲生が提起した「その他」の村落構造類型の検証、または、新たな類型の提起を念頭に置きながら、特に親族の組織化に関する考察を目的としている。

* 福島県立医科大学看護学部講師

表1 南部伊豆諸島村落の特徴をめぐる諸見解

研究者		村武精一	蒲生正男	住谷一彦
概念		世代階層制村落、 または、 双系制を基調とする村落	著しい双系出自規制	世代階層制社会： オヤコとよばれる多系的 Multilateral 親族組織を 随伴する隠居制家族の『世 代』原理が、社会の階層構 造を基礎づけている場合
特徴	年齢階梯制 との差異	なし ※ 非単系制を基調とす る村落として、一括的理解	あり	あり
	その他	双系 bilateral による親 族関係 妻＝母方親族（母族）の 重視 「ゆるやかな父系家族」 村落内婚的傾向 家族内親族名称の世代呼 称への転化 特殊舎屋をめぐる習俗の 濃厚な保持	双系的自己中心的な親族 の組織化 村落における社会的地位 が不明確 村落自体の共同体的性格 の弱さ＝共同事業が不活 発 権威の源泉が非固定的	妻方＝夫方居住規制 村内婚 世代呼称 若者宿・娘宿 特殊舎屋
出典		「最近試みた共同調査か ら－民俗学と社会人類学 －」、『日本民俗学体系月 報』7、平凡社、1959年	「青ヶ島の社会と民俗」、 『岡正雄教授還暦記念論 文集・民族学ノート』、平 凡社、1963年、など	『日本農村社会学の『共同 体論』分析』、 『共同体の史的構造論』、 有斐閣、1963年

この事情は、蒲生が、村落構造類型を構想する前提として、その形成に大きな影響を与えるものとして家族、婚姻、親族組織に関する類型を提起し、なかんずく親族組織を中心にその精緻化を図ってきたと認識するからである。

I 南部伊豆諸島村落の特徴をめぐる諸見解

考察の手がかりとして、村落構造類型論の視点からの先行研究の要点を振り返ってみたい。筆者の学史的な理解では、この点で、蒲生のほか、住谷一彦と村武精一が最もまとまった見解を提示していると思われるので、それらを整理してみたい。

表1から、先行研究を踏まえて南部伊豆諸島の村落類型について考える場合、重要な論点や注目点になると見られることが4点あると思われる。

第一は、年齢階梯制との関係をどうみるか。

第二は、親族の組織化における顕著な双系的、多系的傾向の確認。

第三は、世代的な違いに対するこだわり。

第四は、村落内婚的な傾向の確認。

本研究では、特に第二の論点・注目点を中心に、可能な限り、他の論点や注目点も考察していきたい。なお、蒲生は、村落構造類型を構想する前提となる日本の親族組織に関する類型として、社会人類学における親族論の二つの親族組織化原理を念頭に、最終的に以下の四類型⁸を提起した。念頭において考察を進める。

[A] descent group と kindred の共存

- (a) 同族を形成
- (b) 同族を形成せず

[B] kindred のみ

- (a) patri-lateral
- (b) bilateral 的

II 調査地・中之郷と調査の概況

「中之郷」地区（以下、「中之郷」と称する。）は、南部伊豆諸島の中心となる島・八丈島の東南部＝「坂上」に、三原山を取り囲むように位置する三つの地区の一つで、島内全村の合併で八丈町が成立するまでは、中之郷村として、独立した行政村であった。比較的水が豊富で、島の中では伝統的に米の収穫が多い地域として知られる。古くから心のより所となり、人々を束ねてきた村社である三島神社、長楽寺、妙法寺といった寺社のほか、堂や小祠を有する「七軒在所」、または、「十七軒在所」と呼ばれる草分けの家が知られ、村・地区の指導層（であった）とも伝わる。

村・地区の内部は、伝統的に八つの地域に区分されていた。さらに、それぞれの内部が「隣組」と呼ばれる小単位に細分され、自治の最小単位となっていた。八つの地域は、古くは「コーチ」、「部落」と呼ばれ、「コーチガシラ」、「部落長」と称する代表者の下に統率されてきた⁹。本研究に関わる世帯調査を中心とした民俗調査は、これらの内、「藍ケ里」コーチ・部落（以下、「部落」と称する。）を中心に、その東に隣接する「尾越」部落、西に隣接する「中里」部落において行われた。（以下、「藍ケ里」、「尾越」、「中里」と略称する。）

「藍ケ里」を主たる調査地として選定したのは、地理的に概ね「中之郷」の真ん中に位置していること、役場、学校、農協、公民館など、行政や自治の中心施設や商店も比較的多く位置し、様々な意味で「中之郷」の中心地とみられることに加え、最も多くの家が位置しており、地区全体の状況を推測する有益なデータを、多々集約する上で有利と判断したためである。以下、「藍ケ里」のデータを主体に、「尾越」、「中里」のデータを補助的に利用しながら考察を進めていきたい¹⁰。

なお、筆者が世帯調査（本調査）を行った時期は、1995年4月～1998年12月にかけてである。この間の「中之郷」の総世帯数は450、内、「藍ケ里」は86、「尾越」は42、「中里」は37であった¹¹。また、筆者が世帯調査を行った戸数は、「藍ケ里」が31、「尾越」が10、「中里」が13である¹²。

Ⅲ 親族とは誰か ―主観的に意識される親族―

世帯調査によって集められたデータの分析を通し、まず、「中之郷」の人々が誰を親族と認識しているか、特に、先行研究が示唆する顕著に双系的な傾向に留意し、父方、母方、いずれの系統を辿っても親族が認識され、組織化される事実がどれほど、または、どのように確認されるか検討してみたい。

なお、既述の住谷一彦や畑聰一郎ほか、八丈島をめぐる先行研究の多くが、八丈島の人々が、親族を伝統的に「オヤコ」と呼び習わしてきたことやその意味するところを報告している¹³。筆者はこの点を念頭に予備調査を行ったが、調査時点では、親族を意味する一般的な表現は、「シンセキ」になっていると認識された。この結果、その後の調査では、「シンセキとはどのような人のことですか?」、「シンセキに当たる人とその人との詳しい関係を具体的に教えてください。」などの質問でデータの収集を進めてきた。そこで、以降の記述においては、親族を表現するフォークタームとして、「シンセキ」を用いる¹⁴。

まず、表2をご覧いただきたい。これは、「大切に思うシンセキ=近いシンセキとはどのような人のことですか?」との問に対する「藍ケ里」の人々の見解を整理したものである。「中之郷」では、各戸の世帯主は基本的に夫たる男性である。しかし、すでに夫が逝去し、今は妻が世帯主になっているといった事例も折々にみられ、そうした世帯主からも取材させていただいた。「夫(妻)=Ego=現世帯主方」という表現にはそのような意味が込められているが、その実質は概ね「夫方」である。以降掲げる表についても同様である。パターンⅠは、この間から直ちに想起される親族=「近いシンセキ」が、夫方、妻方、双方の系統を辿って存在するケースであり、パターンⅡは、現世帯主の系統からのみ辿られるケースである。

ここから読み取れる特色は三つと思われる。第一は、前者の割合が全体の8分の1であり、少ないこと。「藍ケ里」に限らず、「中之郷」の世帯主は基本的に男性であるので、「近いシンセキ」は双系的に辿り、意識されるが、実質は夫方の「シンセキ」がより一層重き

表2 藍ケ里における意識される近いシンセキ n=24

パターン		関係		計
		夫(妻)=Ego=現世帯主方	妻(夫)=現世帯主の配偶者方	
Ⅰ	①	オジ、オバ、イトコ	オジ、オバ、イトコ	1
	②	キョウダイ	キョウダイ	2
小計				3
Ⅱ	③	オジ、オバ	/	10
	④	イトコ		7
	⑤	オジ、オバ、イトコ		2
	⑥	キョウダイ		2
小計				21
合計				24

※ オジ、オバに父方、母方の区別はない。

表3 藍ケ里における意識される遠いシンセキ n=3

パターン	関係		計
	夫(妻) = Ego = 現世帯主方	妻(夫) = 現世帯主の配偶者方	
⑦	祖父母のキョウダイ	祖父母のキョウダイ	1
⑧	ハトコ	ハトコ	2
合計			3

※ 祖父母に父方、母方の区別はない。

表4 尾越において意識されるシンセキの遠近関係 n=6

事例	見解	事例数
①	オジとオバとのつながりが強いが、女の人同士の間は一段と強く、特にオバとメイ(姪)の結びつきはとても強い。	1
②	父方のイトコとの結びつきが強い。	2
③	母方の親戚は、母が亡くなると関係が遠くなる。	1
④	オジ、オバとは存命中、付き合いが濃い。	1
⑤	本分家が集うのは、盆と仏(葬式)の時。	1
計		6

を有しているものと思われる。第二は、登場する親族がオジ、オバ、イトコ、キョウダイに限定されていることである。世帯主夫婦と同世代、その親たちと同世代の親族が強く意識されているとみられる。「近いシンセキ」として意識される親族の範囲は二世代であり、世代深度は浅いと言えよう。第三は、オジやオバに父方、母方の区別がないこと。双系的な関係の辿り方は明らかである。なお、イトコやキョウダイにも性別は問われていない。

表3に目を向けてみよう。これは、表2の逆説的な問として、あまり想起されることのない親族 = 「遠いシンセキ」は誰かについての「藍ケ里」の人々の見解をまとめたものである。祖父母の世代やそこから関係が辿られる親族は、もはや疎遠な存在として意識されていることがわかり、表2の分析から明らかにされる第二の特色を裏付けている。

また、祖父母にも父方、母方が区別されず、ここでも双系的な系譜の辿り方が確認される。

同様なことは、他の部落においても当てはまるのであろうか。表4は、「尾越」の人々の見解をまとめたものである。ここには三つの注目点があると思われる。第一は、事例②と③から理解されることとして、「シンセキ」は双系的に辿るが、相対的に父方、夫方にやや重きが置かれているとみられること。第二は、事例①と④が示唆しているように、親族を認識する単位は、基本的に家ではなく個人であるとみられること。個人的な結びつきの強さが、「近い」、「遠い」の認識の違いに影響を与えているのではなかろうか。第三は、事例⑤から明らかのように、出自の共通性で結び付く親族は、「遠い」関係ではあるが、「シンセキ」として意識されているとみられること。親族の組織化の原理は、自己中心的なものだけではないことを示唆している。後ほど詳しく検討したい。

表5 中里における意識される近いシンセキ

n=10

パターン	関係		計
	夫(妻) = Ego = 現世帯主方	妻(夫) = 現世帯主の配偶者方	
①	オジ・オバ	オジ・オバ	4
②	イトコ	イトコ	4
③	キョウダイ	キョウダイ	1
④	フタイトコ		1
	計		10

※ オジ、オバに父方、母方の区別はない。

表5は、同様に「中里」の人々の見解をまとめたものであるが、「藍ケ里」とは逆に、双系的な特色がはっきりと示されている。また、「フタイトコ」はハトコのことであるが、祖父母の世代まで遡って関係が辿られる親族にも、「近いシンセキ」として意識される可能性があることを示している。

以上、三つの部落のデータを精査してきたが、これらを総括すると、「中之郷」全体として、概ね以下の特色を指摘できると考える。第一は、「中之郷」の人々が最も重要として意識する親族＝言わば「シンセキ」の核は、オジ、オバ、イトコ、キョウダイとみられること。意識される親族の世代的な範囲はほぼ二世代であり、狭い。また、概ね伝統的に「オヤコ」の概念で把握されてきた親族と一致している。仮に、“親＝父・母＝オジ・オバ＝同世代：オヤ、子＝世帯主夫婦＝キョウダイ＝イトコ＝同世代：コ”という認識が「中之郷」の人々に共有されているとすれば、「オヤ」、「コ」とは、正に家族内の親族名称を、世代的に同じと把握される親族に対する呼称として敷衍したものと理解できるのではなからうか。表1に掲げた村武の見解は含蓄と思われる。よって、「オヤコ」とは、正にそうした人々の総体を意味するものであったと考える。第二は、幾分、父方、夫方を偏重しつつ、双系的に、そして、主として自己中心的に親族を意識することである。第三は、少なくとも自己中心的な原理で親族を意識する場合、家ではなく、個人を単位に捉えているとみられること。表2、表3、表5は示唆的と思われるので、再度振り返ってみよう。例えば、ここには、「オバ」とは表現されていても、「オバの婚家」とは記されていない。この事情は、「中之郷」の人々が、例えば、オバである女性個人を指示しているためである。表4の事例③と④の言説も改めて参照していただきたい。また、後掲の表14の事例②も示唆的であろう。家を単位に親族を把握する傾向にある本土各地の状況と大きく異なる「中之郷」の特色がここにある。

IV 親族とは誰か 一実態的に認識する親族一

では、現実にはどのような関係にある親族を「シンセキ」と認識しているのであろうか。表6と表7は、「藍ケ里」の各戸で「大切に思うシンセキ＝近いシンセキは誰か、また、どのような関係であるのかを具体的に教えてください」と問いかけた際に得られたデータを整理したものである。社会人類学における親族論の二つの親族組織化原理と、蒲生が提起

した日本の親族組織をめぐる四つの類型との比較を念頭に、データを二つの表に分けて整理した。また、紙幅の制限から「〇〇の婚家」と表現したが、Ⅲ章での考察したように、「中之郷」の人々は、親族を個人単位に把握する傾向にあるので、実質的には、「〇〇が“いる(いた)”ところ」を意味している。以降掲げる表についても同様である。

表6 藍ケ里における実態としての近いシンセキ・その1 <自己中心的に認識されるもの>

n=41

世代		夫(妻) = Ego = 現世帯主方		世代		妻(夫) = 現世帯主の配偶者方	
		関係	計			関係	計
父方	+ 2	父の母の実家	1	父方	+ 2	父の父の実家	1
		父の母の実家の分家	1			父の父の実家	1
	+ 1		0		+ 1	父の姉妹の婚家	1
小計			3	小計			2
母方	+ 2	母の母の実家	3	母方	+ 2	母の父のキョウダイの婚家	1
		母の父の姉妹の婚家	1			+ 1	母の実家
	+ 1	母の実家	4		母の姉妹の婚家		5
		母の実家の本家	2				母の兄弟の婚家
		母の実家の分家	1				
小計			17	小計			2
0		姉妹の婚家	6	0		姉妹の婚家	1
		実家	4		姉妹の娘の婚家	1	
小計			10	小計			6
上位世代合計			30	上位世代合計			10
上位世代累計							40
- 1		長男の嫁の実家					1
下位世代累計							1
総計							41

表7 藍ケ里における実態としての近いシンセキ・その2 <祖先中心的に認識されるもの>

n=11

関係	計
本家	7
分家同士	4
合計	11

まず表6から判明する特色は五つあると思われる。第一は、「近いシンセキ」が夫方、妻方、双方に亘って認識されていること。しかし、割合からは、妻方は夫方の3分の1(10/30)であり、明らかに夫方の親族の方が多く認識されている。第二は、特に、夫方母方の親族の割合が突出していること。総事例数の半分(17/41)に迫る割合である。第三は、「母」、「姉妹」、「嫁」が頻出することである。要するに、女性の親族やそれを介したつながりが重視されていることがわかる。第四は、認識される親族の世代が、Egoと配偶者の世代を挟み、上下4世代にまたがっていることである。実態として認識する親族の世代深度は、重視して意識する親族の場合よりも広いのである。第五は、「本家」、「分家」という言葉の登場に端的なように、出自的なつながりについても相応に重視されているとみられることである。なお、この場合は、親族を認識する単位は個人ではなく、家である。

続けて表7に目を向けてみよう。「藍ヶ里」の人々は、実は、出自の共通性によって結び付く“家”もまた、「近いシンセキ」と認識しているのである。主観的に意識される親族には含まれておらず、この点で大きな違いを確認することができる。おそらく意識の上では相対的に重要性の低い、より一層「遠いシンセキ」の一部なのであろう。なお、表6と合わせて考察すると、<祖先中心的に認識されるもの>の割合は、21%(11/52)程度となる。2割を超える数字には、相応に重みがあるのではなかろうか。

表8 尾越における実態としての近いシンセキ・その1<自己中心的に認識されるもの>

n=18

世代		夫(妻) = Ego = 現世帯主方		世代		妻(夫) = 現世帯主の配偶者方	
		関係	計			関係	計
父方	+2		0	父方	+2		0
	+1	父の兄弟の婚家	2		+1		0
小計			2	小計			0
母方	+2	母の母の姉妹の婚家	2	母方	+2		0
	+1	母の実家 母の姉妹の婚家	1 1		+1		0
小計			4	小計			0
0		姉妹の婚家	1	0		姉妹の婚家 実家 実家の本家 実家の分家	5 3 2 1
小計			1	小計			11
上位世代合計			7	上位世代合計			11
上位世代累計							18
下位世代累計							0
総計							18

はたして、同様なことは他の部落においても確認できるのでしょうか。表8と表9は、「尾越」から収集された同種のデータを整理したものである。表8をみてみよう。ここから「藍ヶ里」と異なる特色を二点指摘できると思われる。第一は、夫方よりも妻方の親族の割合が多いこと。筆者の主観では、それほど大きな差ではなく、むしろバランスよく双系的な親族の捉え方を象徴しているようにも思われる。第二は、二世前まで関係を辿る親族も登場するが、認識される親族の大半は、Egoと配偶者の世代を起点に、上位二世代の範囲に含まれていることである。実態として認識する親族の世代深度は浅い。続けて表9に目を向けてみよう。「本家」、「分家」と異なり、直系的に結び付かない「分家同士」が登場している。「尾越」の人々に、出自的、系譜的な認識が相応に強いことを意味しているのではなからうか。表8と合わせて考察すると、「近いシンセキ」に占めるく祖先中心的に

表9 尾越における実態としての近いシンセキ・その2<祖先中心的に認識されるもの>

n=4

関係	計
本家	1
分家同士	3
合計	4

表10 中里における実態としての近いシンセキ・その1<自己中心的に認識されるもの>

n=27

世代		夫(妻)=Ego=現世帯主方		世代		妻(夫)=現世帯主の配偶者方	
		関係	計			関係	計
父方	+2	父の父の姉妹の婚家	1	父方	+2		0
	+1	父の姉妹の婚家	2		+1	父の姉妹の婚家	1
小計			3	小計			1
母方	+2		0	母方	+2		0
	+1	母の実家 母の実家の分家	3 2		+1	母の実家	1
小計			5	小計			1
0		姉妹の婚家	3	0		実家	4
		実家	2				
		兄弟の婚家	1				
小計			10	小計			6
上位世代合計			18	上位世代合計			8
上位世代累計							26
-1		長男の嫁の実家					1
下位世代累計							1
総計							27

表 11 中里における実態としての近いシンセキ・その2 <祖先中心的に認識されるもの>

n=7

関係	計
本家	3
分家	2
分家同士	2
合計	7

認識されるもの>の割合は、約 18% (4/22) となる。

「中里」の状況はどのようであろうか。表 10 と表 11 は、「尾越」から収集された同種のデータを整理したものである。表 10 からみてみよう。ここから確認される基本的な特色は、「藍ヶ里」の場合と同様と思われる。但し、妻方の親族が総事例数に占める割合は約 30% (8/27)、夫方の事例との比較では、約 1 対 2 (8 対 18) となり、一段と妻方の親族が占める割合が高くなっている。続けて表 11 を検討してみよう。ここにも「分家同士」が登場する。表 10 と合わせて考察すると、「近いシンセキ」に占める<祖先中心的に認識されるもの>の割合は、約 20% (7/34) となる。

ここまですを総括すると、「中之郷」の人々が、「近いシンセキ」として実態的に親族を認識する場合の特色をめぐり、以下のことを指摘できるように思う。第一は、基本は自己中心的、双系的な認識であるが、やや夫方に傾斜しているとみられること。第二は、出自の共通性＝祖先中心的な認識も相応に (2 割程度) みられること。第三は、自己中心的に認識される親族の世代は、Ego と配偶者の世代を挟み、概ね上下に合わせて 4 世代とみられること。上位世代への遡及的な認識は祖父母の世代までで、親族を認識する世代深度は比較的浅い。第四は、女性の親族とそこから辿られる関係が重視されているとみられること。

V 親族の交際 —盆礼の場合—

では、「中之郷」の人々は、こうした「シンセキ」とどのように付き合っているのだろうか。全国一般に親族の交際が活発に展開すると共に、親族ごとに付き合いの濃淡が現れることが知られる場面として、正月と盆の時期が知られる。「中之郷」に限らず、八丈島全体においてもこの点は同じである。特に、盆は先祖供養の機会であって、先祖もまた親族であるので、どのような先祖が供養の対象となるかを把握することで、親族に対する認識の細部の特色を知る手掛かりが得られる可能性がある。そこで、盆の時期における墓参や家への訪問など、盆礼の実態に注目して、「中之郷」の親族の交際と親族の組織化の特色を重ねて考察してみたい。

「中之郷」における盆礼は、基本的に物故者が葬られている墓への参拝である。特に、逝去から 3 年間は重視され、この間は、その家族が盆の時期に墓に提灯や灯籠を置いて、喪に服する期間であることを示すことが習いとなっており、縁故者にとっては毎年欠かさず丁寧な墓参を行うことが規範となっている。

表 12、表 13、表 14 は、「藍ヶ里」、「尾越」、「中里」の人々の盆礼のあり方に関する言

表 12 藍ケ里における盆礼のあり方に関する見解

n = 3

事例	見解	計
①	中之郷の家であれば、新仏が出た家には、すべて墓参りに行く。	1
②	中之郷の家であれば、新仏が出た家には、シンセキであれば仏壇にも必ずお参りする。	1
③	自分の家の墓の周囲に、提灯がついた墓があれば、新仏が出たわけなので、どこの家の墓であれお参りする。	1
合計		3

表 13 尾越における盆礼のあり方に関する見解

n = 2

事例	見解	計
①	仕事仲間やつき合いの濃かった人の家には、新盆を迎えた場合、3年間は墓参りにいく。	2

表 14 中里における盆礼のあり方に関する見解

n = 3

事例	見解	計
①	不幸があった時は、3年間墓参りに行く。	1
②	本家も世帯主が世代交代すると関係が遠くなり、お参りに行くとは限らない。	1
③	シンセキであるかどうかに関わらず、付き合いの濃かった人のところへは、新盆の3年間だけは墓参する。	1

説を紹介したものであるが、概ね「中之郷」全般に共通すると思われる盆礼の規範を理解できよう。特に注目を要するのは、表 12 の事例②である。「シンセキ」に対する盆礼は、墓参のみならず、仏壇に参ることも習いとなっている。また、表 14 の事例②は、例えば、祖先中心的に認識される本家のように、「シンセキ」の中にも、墓参のあり方に違いが生ずるものがあることを明らかにしている。墓参すら行かなくなる「シンセキ」は、おそらく意識の上でも実態としても疎遠な親族なのであろう。翻って盆の時期に恒常的に仏壇にも参る「シンセキ」は、実態的に極めて大切な親族＝「近いシンセキ」と思われる。よって、それらがいずれであるかを確認することで、実態として認識している「近いシンセキ」を把握することができることになる。

表 15 と表 16 は、「藍ケ里」の各戸が、盆礼において仏壇にも参る家はいずれかについて調査したデータを整理したものである。まず表 15¹⁵⁾を検討してみたい。ここから確認される特色は、基本的に表 6 の場合と同様と思われるが、特にそれとの比較で気づかされる特色が二つあると思われる。第一は、収集された事例の総数が多いことである。表 6 のその 2 倍を超える量となっている。意識の上でも実態的にも、実は潜在している親族が多々存在することを示唆するものであろう。第二は、「兄弟」がいずれの世代にも登場することである。また、「婿」も登場する。先祖供養においては、男性の親族やそれを介したつながりも相応に重視されるということであろうか。この場合の先祖の辿り方にも、双系的な原理が見出せる。第三は、妻方の親族を辿る世代深度が+1（父母の代）までになっていることである。この点では、先祖供養の対象となる親族は明らかに夫方に傾斜している。

但し、事例の総数に占める妻方の親族の割合は、約 40% (39/97) となる。決して少なくない量と言えよう。第四は、ここでも夫方母方の親族の割合が、約 23% (23/97) と最も多くなっていることである。第三の特色とも照らし合わせ、妻方、母方の系譜に相応の重みが置かれていると理解されよう。表 16 に目を転じてみると、祖先中心的に認識さ

表 15 藍ヶ里における盆礼において訪問する近いシンセキ

その 1 <自己中心的に認識されるもの>

n=97

世代		夫(妻) = Ego = 現世帯主方		世代		妻(夫) = 現世帯主の配偶者方	
		関係	計			関係	計
父方	+ 2	父の母の実家	2	父方	+ 2	/	
		父の母の実家の分家	1				
		父の母の兄弟の婚家	1				
		父の父の実家	1				
	+ 1	父のキョウダイの婚家	7		+ 1	父のキョウダイの婚家	7
	父の姉妹の婚家	6		父の姉妹の婚家	1		
小計			18	小計			8
母方	+ 2	母の母の実家	1	母方	+ 2	/	
		母の父の姉妹の婚家	1				
		母の父の兄弟の婚家	1				
	+ 1	母のキョウダイの婚家	7		+ 1	母のキョウダイの婚家	7
		母の姉妹の婚家	5			母の実家	2
		母の実家	4			母の姉妹の婚家	1
		母の兄弟の婚家	3			母の実家の本家	1
	母の実家の本家	1					
小計			23	小計			11
0		キョウダイの婚家	8	0		実家	7
		実家	4			キョウダイの婚家	5
		姉妹の婚家	2			兄弟の婚家	3
		弟の嫁の実家	1			姉妹の婚家	2
						イトコの婚家	2
				実家の分家	1		
小計			15	小計			20
上位世代合計			56	上位世代合計			39
上位世代累計							95
- 1		嫁の実家				嫁の実家	1
		婿の実家				婿の実家	1
下位世代累計							2
総計							97

れる親族もまた、盆礼の対象となっていることがわかる。特に本家との結び付きの強さを理解することができよう。表 15 と重ね合わせて考察すれば、盆礼の対象となる親族全体に占めるこうした事例の割合は、約 14% (16/113) である。

表 16 藍ケ里における盆礼において訪問する近いシンセキ

その 2 <祖先中心的に認識されるもの>

n=16

関係	計
本家	10
分家同士	3
本家の本家	1
分家	1
同姓（共通の祖先を有すると伝わる）の家	1
合計	16

表 17 尾越における盆礼において訪問する近いシンセキ

その 1 <自己中心的に認識されるもの>

n=22

世代		夫（妻）=Ego=現世帯主方		世代		妻（夫）=現世帯主の配偶者方	
		関係	計			関係	計
父方	+ 1	父の兄弟の婚家	1	父方	+ 1		0
小計			1	小計			0
母方	+ 1	母の実家	3	母方	+ 1		0
		母の姉妹の婚家	3				
		母の兄弟の婚家	3				
		母の実家の分家	1				
		母の弟が創設した家	1				
小計			11	小計			0
0		キョウダイの婚家	2	0		実家	2
		姉妹の婚家	1			キョウダイの婚家	1
		実家	1				
		イトコの婚家	1				
小計			5	小計			3
上位世代合計			17	上位世代合計			3
上位世代累計							20
- 1		嫁の実家					1
		婿の実家					1
下位世代累計							2
総計							22

表 18 尾越における盆礼において訪問する近いシンセキ

その2 <祖先中心的に認識されるもの>

n=6

関係	計
分家	4
本家	2
合計	6

同様な傾向を「尾越」や「中里」でも確認できるであろうか。まず、「尾越」から収集された同種のデータを整理した表 17 と表 18 から検討してみたい。表 17 をご覧いただきたい。特に表 8 の特色と比べながら考察してみると、次のような特色を確認することができよう。第一は、表 8 とは反対に、妻方よりも圧倒的に夫方の親族の割合が多くなっていること。現世帯主夫婦の子どもの世代にまで及んで関係が辿られている点も大きな違いである。日常的な付き合いにおいては妻方が、先祖供養の場面では夫方が重視されるということであろうか。第二は、認識される親族の大半は、現世帯主夫婦の世代を起点に、上位二世代の範囲に、全体では上下三世代の範囲に含まれていることである。ここでも実態として認識する親族の世代深度は浅い。その他、「兄弟」が登場するなど、「藍ケ里」の場合と同様な特色を確認することができる。続けて表 18 をみてみよう。「尾越」でも、祖先中心的に認識される親族もまた、盆礼の対象となっていることがわかる。表 17 と重ね合わせて考察すれば、盆礼の対象となる親族全体に占めるこうした事例の割合は、約 21% (6/28) である。2割を超える数字には重みがあるのではなかろうか。

「中里」はどうであろうか。同様に、表 19 と表 20 から検討してみたい。特に表 10、表 11 と比べながら考察してみると、以下の特色を確認することができよう。第一は、自己中心的に認識される親族も、祖先中心的に認識される親族も、総量において、表 10、表 11 のデータよりも少ないことである。事情はわかりかねるが、「藍ケ里」、「尾越」とは全く正反対な状況を呈している。第二は、妻方の親族を辿る世代深度が+1 (父母の代) までとなっており、+2 (祖父母の代) まで辿る夫方と違いがある。先祖供養の対象となる親族は、この点でも量的にも明らかに夫方に傾斜している。第三は、夫方父方と妻方の事例数が共に 6 で最多となっていること。他の部落とは大きく異なる点である。続けて表 20 に目を転じてみよう。表 19 と重ね合わせて考察すれば、盆礼の対象となる親族全体に占めるこうした事例の割合は、約 17% (4/23) である。

ここまですを総括すると、「中之郷」の人々が、「近いシンセキ」として盆礼の対象とする親族の実態をめぐり、以下の特色を指摘できるように思う。第一は、基本は自己中心的、双系的な認識で把握されるが、夫方に傾斜するとみられること。第二は、出自の共通性＝祖先中心的な認識で把握される親族もみられること。但し、日常的に認識されるものよりも数は減少する。第三は、自己中心的に認識される親族の世代は、現世帯主夫婦の世代を挟み、概ね上下に合わせて4世代とみられること。日常的な認識と変わらない。上位世代への遡及的な認識は祖父母の世代までで、親族である無限に広がる先祖を供養する機会であるにもかかわらず、対象とする親族を認識する世代深度は比較的浅い。第四は、男性の

表 19 中里における盆礼において訪問する近いシンセキ

その1 <自己中心的に認識されるもの>

n=19

世代		夫(妻) = Ego = 現世帯主方		世代		妻(夫) = 現世帯主の配偶者方		
		関係	計			関係	計	
父方	+ 2	父の父の妹の婚家	2	父方	+ 2	/		
		父の父の弟の婚家	1					
	+ 1	父の姉の婚家	2		+ 1			
		父の兄が養子に出た家	1					
小計			6	小計			0	
母方	+ 1	母の実家	2	母方	+ 1	母の実家		1
		母の実家の分家	1					
小計			3	小計			1	
0		実家	2	0		実家		5
		イトコの婚家	1			実家の分家		1
小計			3	小計			6	
上位世代合計			12	上位世代合計			7	
上位世代累計							19	
下位世代累計							0	
総計							19	

表 20 中里における盆礼において訪問する近いシンセキ

その2 <祖先中心的に認識されるもの>

n=4

関係	計
本家	3
分家	1
合計	4

親族とそこから辿られる関係も、相応に重視されるとみられること。双系的に親族を認識する傾向がうかがえる。

結語

これまでのデータの分析と考察を踏まえるならば、「中之郷」の人々の親族に対する認識やその組織化をめぐる、以下のような特色を総括できると考える。

第一は、「中之郷」の人々にとっての親族 = 「シンセキ」には、<自己中心的に組織されるもの>と<祖先中心的に組織されるもの>の双方があるが、量的には、前者が概ね8割を占める。また、こうした「シンセキ」を認識する単位の基本は家ではなく、個人である。

第二は、<自己中心的に組織されるもの>を認識する系譜的な辿り方は、双系的である。特に祖先祭祀の場面では、このことが一層明確になる。但し、相対的に重視されるとみら

れる系統と性別があり、それは夫方と母方、そして、女性である。

第三は、<自己中心的に組織されるもの>を遡及的に認識する場合、その世代深度は概ね+2=祖父母の世代までである。認識の対象となる世代深度は浅い。

第四は、第一義的に意識される(想起される)「シンセキ」は<自己中心的なもの>であり、特に、世帯主とその配偶者のオジ、オバ、イトコ、キョウダイが最も重視されているとみられる。そして、「オヤコ」とは、親と子に準じるものとして、こうした最も大切と意識する「シンセキ」を、伝統的に網羅する概念であったと思われる。それ故に、親世代、子世代、二世世代間の突出した強い結びつきを、親族の組織化における特色として指摘することもできよう。

第五は、<祖先中心的なもの>の実態は、概ね本家と分家、分家の仲間同士とみられる。それ以上の広がりには稀である¹⁶。

こうした特色を踏まえ、「中之郷」の親族の組織化は、蒲生の掲げた日本の親族組織に関する四類型のいずれに分類されるかと問えば、「[B] kindred のみの(b) bilateral 的」ではなく、「[A] descent group と kindred の共存の(b) 同族を形成せず」に該当するものと思われる。期せずして、蒲生の予見とは異なる見解となったが、今後の研究の深化を目指し、以下の二点をコメントしてまとめとしたい。その第一は、蒲生の四類型をめぐって、「[A] descent group と kindred の共存」というパターンには、単に“共存”ではなく、“相対的にいずれが重視されているか”という評価の観点を持ち込み、亜類型=下位カテゴリーを設けてみるのが有効なのではなかろうか。第二は、蒲生が実際に主として調査したのは青ヶ島であったが、その後の類型の構想に際して想起した南部伊豆諸島は、実質的に青ヶ島であったのではないかということである。筆者らのこれまでの調査では、一般に南部伊豆諸島と一括されるが、八丈島と青ヶ島では、結構異なった文化的特色が存在することに気づかされてきた。青ヶ島の村落を対象に考えた場合は、蒲生の見解通りなのかもしれない。検証のための調査と後日の報告を約束し、結びとしたい。

注

- 1 住谷一彦、1973年、「村落構造の類型分析—研究史の動向に寄せて—」、喜多野清一博士古稀記念論文集、『村落構造と親族組織』、未来社
- 2 上野和男、1992年、『日本民俗社会の基礎構造』、ぎょうせい
- 3 蒲生正男、1952年、「日本社会の地域性」、『日本地理新体系』2、河出書房
- 4 蒲生正男、1981年、「日本の伝統的社会構造とその変化について」、『政経論叢』、34(6)、明治大学政治経済学部
- 5 清水浩昭、1984年、「家族・世帯構成の地域差」、『老年社会科学』6(1)
- 6 上野和男、1985年、「日本の位牌祭祀と家族—祖先祭祀と家族類型についての一考察—」、『国立歴史民俗博物館研究報告』6
- 7 蒲生正男・坪井洋文、1975年、「青ヶ島の社会組織と民俗宗教」、『伊豆諸島』、未来社
- 8 蒲生正男、1979年、「日本のイエとムラ」、『世界の民族』13
- 9 八丈島の社会を理解する上で、「コーチ」や「部落」の本質をめぐる検討も過去に活発であった。自然村とみるか、村組とみるか、共同体としての性格の有無、機能などと絡んで議論が展開してきた。しかし、筆者はこの点をめぐっても、研究者の間で、なおも十分なコンセンサスは得られていないと認識しており、特に村落構造類型の設定と関わって、引き続き詳細な検討の余地があると考え、この点の調査も手がけてきた。本稿の続編として、別稿を草したい。
- 10 調査に先立って、筆者が特に参照した「中之郷」の民俗や社会をめぐる先行研究としては、以下のものがある。
畑聡一郎、1981年、「島嶼社会の変化と小地域集団—八丈島を事例として—」、『季刊人類学』12-1、京都大学人類学研究会

浅沼良次、1992年、「八丈島 中之郷（中之郷藍ケ里）」、『東京の民俗』8、東京都教育委員会

- ¹ 中之郷自治会名簿による。調査当時、中之郷自治会では、インキョ制家族のインキョ（インキョ屋）とボーエ（母屋）を原則的に別世帯として数えていた。従って、家族を単位に数え上げると、この数は減少する。筆者の世帯調査は、家族を単位とするものであった。
- ² 但し、以下のデータの分析や考察には、その後、2009～2011年にかけて科学研究費補助金基盤研究（C）MO21520823によって行われた調査の成果が反映している。
- ³ 例えば、前掲、畑聰一郎によれば、「八丈島でオヤコとは、血縁的な親と子の関係のみをさすのではない。むしろ、親類関係にあるものをオヤコと呼び、非血縁関係であっても、エビシオヤや子守なども含めてオヤコと称することがある。」と記している。
- また、長戸路武夫、1992年、「八丈島末吉（末吉村宮ケ路）」、『東京の民俗』8、東京都教育委員会には、「オヤコという。範囲は父母、兄弟姉妹、子供、祖父母、おじおば、おいめい等。更に母方や妻方の親戚を含めるが、これはその時々次第で、そのつきあいの濃度は不定である。つきあい方は、祝儀、不祝儀の協力は勿論、屋根替、家の工事、農作業等の労力提供を相互にやりあう。」と紹介されている。
- 特に後者の指摘が端的と思われるが、「オヤコ」の本質は、概ね *kindred* と考えられよう。
- ⁴ 但し、例えば、「この人とは、なぜシンセキなのでしょうか？」と問うと、「オヤコだから」という答えが戻って来ることもあった。シンセキとは、すなわち、自分が「オヤコ」と思う人であるという認識が伺われた。調査時点においても、「オヤコ」の概念が完全に色あせていたわけではない。
- ⁵ 「キョウダイ」とは、調査の過程で、「姉妹」とも「兄弟」とも、詳細を把握できなかった事例を一括して意味している。以降に掲げる表においても同様である。
- ⁶ 「中之郷」では、本家を「モトエ」、分家を「ブンケ」と呼び、別な概念で捉える認識や系譜の本末関係に対する認識がみられる。しかしながら、これまでの筆者らの調査によれば、本分家の間でそれ故に他の家にはない誼を抱きつつも、庇護奉仕のような主従関係、優先的な互助協力、共同の祖先祭祀といった行動は見出せない。但し、「七軒在所」、または、「十七軒在所」が有する小祠など、共同で祭祀する神仏の保有は一部にみられる。総じて言えば、「中之郷」の本分家には、出自的な結びつきを認識していても、同族一般に知られる特色はほとんど見出せない。本質は、仮に「系譜グループ」とでもいったものであって、筆者は「中之郷」に同族は形成されていないと認識している。